

原 著

英文読解の教育

—— 日本人大学生の英文読解を例に ——

清 水 研 明

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成8年5月22日受理)

On the Reading of English Texts by Japanese College Students

Kenmei SHIMIZU

*Department of Medical Social Work
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted May 22, 1996)*

Key words : structure strategy, coherence, cohesion, global, local

Abstract

Japanese college students tend to see an English text as a list of sentences. They must be taught that every text is coherent. There are two ways they can find the coherence : the bottom-up way of reading and the top-down way of reading. In the bottom-up way of reading, cohesions, explicit signals of coherence, help them to understand the coherence. In the top-down way of reading, background knowledge on how English texts are structured helps them to infer the coherence. In this paper, both coherence and cohesion are divided into two types, local and global, and the importance of global coherence/cohesion is stressed in teaching how to find the coherence.

要 約

日本人大学生は、文法中心の英語教育を受けてきており、英文テキストを単に文のリストとして読みがちである。そのような大学生に対し、テキストは文のリストではなく固有の構造を持つものであり、テキスト上に与えられた情報があればそれを手掛かりにして、或いは、そのような情報が与えられていない場合は、英文テキストの構造についての知識を駆使して、テキスト生産者の意図する論理的筋道をたどることが必要である。本論は、コヒアランスとコヒージョンをそれぞれ、グローバルなものとローカルなものに分けることにより、英文テキストの読解教育の方法を論じている。

1. はじめに

「読解」とは、テキストを読んで理解することであり、従って本論では「テキスト」を、音声言語を除く、文字言語による言語連鎖¹⁾に限定する。

厳密に言えば、テキストが一つの文から成っていることは十分に有りえることではある。警告・スローガン等は、むしろ一つの文がテキストを構成しているのが一般的であると言ってよいであろう。しかし、大学における英文読解教育の目的は、英語の論文、文学作品、エッセイ、記事等の読解にあり、特に断らない限り、テキストが複数の文から成ることを前提として論を進めていくことに異議はないと思われる。又、本論では、特に説明文 (expository prose) に焦点をあてて議論を進める。実際問題として、大学生が専門科目の研究を進めて行く上で、より切実に読む必要のある英文は、一般的には文学作品よりは、論文を含む説明文であると言って過言ではないであろう。

「読解」の対象を文ではなくテキストとすることは重要な意味を持っている。すなわち、従来の文文法ではカバーできない部分があるということである。現在主流のチョムスキー学派の文法理論始め、大半の文法研究・文法教育において、その対象は文であり、文法とは文の構造に関する理論であり、文を超える言語連鎖を対象とする研究・教育は周辺的な価値しか与えられていない。

これは、言語能力の解明を第一の研究目標に掲げているチョムスキー学派にとって、言語によるコミュニケーションの典型例であるテキストは、言語運用の領域であり副次的な価値しか認められていないためであると考えられるであろう。又、テキストの読解を単一の文の読解の単純な足し算であるとする見方が、ある程度の支持を得ているためであると考えられるであろう。

しかし、現実に大半の大学生が外国語科目として英語を選択し、コミュニケーションの手段としての英語の習得が至上命令である教育現場において、文文法の教育に終始し、個々の文の

翻訳が「英文読解」の授業の中心であっては、学生は英文テキストの十分な読解力を身に付けることはできない。

次章以下では、文文法ではカバーできないテキストの持つ特性とは何かについて述べてみたい。

2. コヒアランスとコヒージョン

テキストを構成する個々の文は、恣意的に並べられているのではなく、より能率的 (efficiently)・有効的 (effectively) にメッセージをテキスト受容者に伝えるというテキスト生産者の目的を達成するという意図をもって配置されている。コヒアランス (coherence) とは、テキスト生産者が、伝えられるべき内容であるメッセージを成す各概念間に与えた関係を意味する²⁾。従って、テキストの厳密な定義は、単なる言語連鎖ではなく、コヒアランスを持った言語連鎖であるとしなければならないことになる。それに対し、テキスト上でテキスト構成要素間の相互依存関係を示す明示的言語表現をコヒージョン (cohesion) と言う³⁾。

従って、テキスト生産者の意図しているコヒアランスは、常に相応する言語表現を与えられコヒージョンとしてテキスト上に実現されているとは限らないことになる。テキスト受容者の立場からは、与えられたコヒージョンからコヒアランスを推測し、組み立てていく他ないのだが、テキスト生産者は、まずコヒアランスがあり、それに言語表現を与えてコヒージョンとしてテキスト上に実現させていくことになる。

3. グローバルとローカル

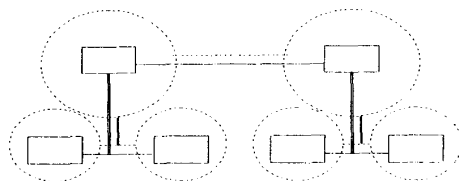
テキストにおいて、文より大きい明示的な単位に、例えば、パラグラフがある。パラグラフを構成しているすべての文が、パラグラフ全体の意味を形成するのに、同等の貢献しているかどうかを考えてみると、そのようなテキストも存在するであろうが、大学の英文読解の教材として使われるテキストであるならば、ある程度の込み入った議論が展開されているであろうし、そのようなテキストのパラグラフにおいては、各文の持つ内容の重要度には差が有り、重要度別に階層を成していると考えられることができる。

従って、テキストを構成する各文は、互いにコヒージョンによって線的に関係付けられているばかりではなく、意味的に階層を成している、すなわち、テキスト構造 (text organization = パラグラフのような文以上のレベルのテキスト上の単位が、より小さな単位から構成されるとする内容上の構造) を形成している。このように、より重要度の高い階層を成している文及び文連鎖間の関係と、より重要度の低い階層を成している文及び文連鎖間の関係を区分することは、テキストの読解過程を明らかにする上で、又、英文読解の教育において、重要な意味をもってくる。

テキスト読解の上で、すなわち、テキスト受容者の立場から特に大事なものは、重要度の低い階層から重要度の低い階層に移行することを示すコヒージョンと重要度の高い階層から重要度の低い階層に移行することを示すコヒージョンであり、本論では、上記の関係を示す表現を、グローバル(global)なコヒージョンとし、より重要度の低い階層内及びより重要度の高い階層内の文及び文以上の単位間の関係をを示す表現を、ローカル(local)なコヒージョンとする。更に、コヒアランスも同様に、グローバルなコヒアランスとローカルなコヒアランスを区別することにする⁴⁾ (図1参照)。

4. 読解ストラテジー

テキストの生産者は、コヒアランスを全てテキスト上に明示的に表現するとは限らないとす



- = 文
- = 文に相応する明示的に言語化される前の心的表象
- = ローカル・コヒージョン
- = ローカル・コヒアランス
- == = グローバル・コヒージョン
- = グローバル・コヒアランス

図1 グローバル・コヒアランス, グローバル・コヒージョンとローカル・コヒアランス, ローカル・コヒージョン

ると、テキスト受容者は、明示的に表現されたコヒージョンを手がかりにして、テキスト構造を組み立てなければならない。例えば、テキスト構造の強調表現はシグナリング (signaling) と呼ばれ、個々のテキストのタイトルや下線や太字等を含み、コヒージョンよりも範囲は広いが、テキスト受容者がテキスト構造を組み立てるのに、有効に利用されていることが知られている⁵⁾。

しかし、シグナリングや、5種類(照応(reference), 代用(substitution), 省略(ellipsis), 接続(conjunctive), 語彙連結(lexical cohesion))あるとされる英語のコヒージョンの知識があっても、それらがテキスト上に具現化されない場合があるとする、そのような場合に対応してテキスト構造を把握するには、どのようにすればよいのかを考える必要がある。

テキスト全体の内容を良く理解することのできる読み手と、最初は個々の文の内容は何とか理解できるが、徐々に文と文との繋がり方が分からなくなり、最後にはテキスト全体の内容が全然理解できなくなってしまう読み手の違いは、その読解ストラテジーの違いにあるとする考えがある。Meyer et al (1980) では、テキスト構造において一番階層性の高い層 (top-level structure) が特定のテキスト構造のどのタイプかを見極める読解ストラテジーを構造ストラテジー (structure strategy) としている。この構造ストラテジーによらず、個々の文を個別に理解することに終始し、テキストを文のリストとして解釈してしまうと、テキストの読解に支障をきたすとしている⁵⁾。

又、Gernsbacher (1990) では、テキストの個々の文を完結した構造として読み進めて行くと、本来コヒアレントであるテキストであっても、そのコヒアレン性を見失い、結び付けられるべき文同士が関係のない構造として処理されるため、テキスト全体の構造が把握されなくなるとしている。それに対し、テキストを読む際に、本来コヒアレントであると思われる部分を、文の境界を超えて一つの構造として読み進めて行くと、テキスト構造全体の理解が容易になるとしている。すなわち、読解力の差は個人の記憶

力の差ではなく、ワーキング・メモリー (working memory) として、文の境界を超えたコヒアレントな構造を保持しているか、単一の文を完結した構造として保持しているかの差であるとするのである⁶⁾。

このように、テキストを読んで理解できるか否かは、テキストの各文を同等の重要性を持つとするのではなく、明示的なシグナリングやコヒージョン、特にグローバル・コヒージョンが示されていない場合でも、テキストの階層性を読み取り、より重要度の低い文及び文連鎖と、より重要度の高い文及び文連鎖を区分し、後者を中心とするテキスト構造を読み取り、コヒアランス、特にグローバル・コヒアランスをどこ迄組み立てることができるか否かに依ると言うことができる。

5. テキスト構造

いわゆる文法を通常6年間学習してきた大学生に、どのような教育によりテキスト読解の能力を身に付けさせることができるのであろうか。コヒージョンを中心とした「テキスト文法」を新たな「英文法」として習得させることも必要であろう。「文法」に対して食傷気味であろう学生に対し、抽象的な構文論ではなく、実際の英文テキストを使って、より実践的な授業により学生の興味を引きつけることが必要になるであろう。

しかし、先に見てきたように、コヒアランスを組み立てるべき基礎となるコヒージョンがテキスト上に示されていない場合にも対応できる読解ストラテジーをテキスト受容者たる学生に身に付けさせることも必要である。例えば、典型的な物語 (narrative story) は物語文法 (story grammar) に沿って筋が展開されているとされ、読み手は、明示的なコヒージョンが示されていなくても、グローバル・コヒアランスを組み立てることはそれほど困難ではない。なぜなら、幼児期から繰り返し母親に読み聞かせられ、又自ら多くの物語を読むことにより、人間は、かなり早い時期からその社会に特有な物語文法、即ち、物語テキストに特有なグローバル・コヒアランスを文字通り身に付けているためであると

言われている。

同様に、説明文においても、固有のテキスト構造があり、その構造に沿って論理の展開がなされるとされている。Meyer & Freedle (1984) では、説明文は、集合 (collection)、記述 (description)、原因結果 (causation)、問題解決 (problem/solution)、比較 (comparison) の5種類のテキスト構造の何れかに属し、当のテキストがどのテキスト構造に当てはまるのかを知ることにより、テキストの理解が容易になるとしている⁷⁾。先に述べた、テキスト構造における一番階層性の高い層 (top-level structure) とは、具体的には、この5種類のテキスト構造のことであり、例えば、問題解決のテキストにおいては、「問題」を構成している文或いは文以上の単位からなる部分と、その問題の解決を示す「解決」を構成している文或いは文以上の単位からなる部分を見いだすことが重要になってくる。

6. トップ・ダウンとボトム・アップ

説明文において、グローバル・コヒージョンがテキスト上に示されていない場合、例えば、5種類あるとされているテキスト構造を熟知することにより、明示的に示された内容からそのテキストのテキスト構造を把握し、コヒアランスを組み立てることができるかもしれない。この様に、テキスト受容者が既に持っている知識から、テキスト上に明示的に示されていない情報を推測することによりテキストの読解を進めることを、トップ・ダウン (top-down) 式の読解と呼ぶ。それに対し、例えば、明示的に示されたコヒージョンからテキストのコヒアランスを組み立てるように、テキスト上に示された明示的な情報からテキストの読解を進めることをボトム・アップ (bottom-up) 式の読解と呼ぶ⁸⁾。

しかし、明示的な情報が全然なければ、テキスト受容者はどの知識を活性化すべきかをすることができず、又、全ての情報が明示的に示されたテキストでない限りは、テキスト受容者は何らかの形で明示的に示されていない知識を活用してテキストを読解していると考えることができる。従って、実際には、テキスト受容者はトップ・ダウン式とボトム・アップ式を相互に

補完させてテキストを読みすすめて行っていることになる。

日本人大学生の英文読解の教育においては、テキスト構造についての知識を深めさせることによりトップ・ダウン式の読解を、コヒージョンの知識を深めることによりボトム・アップ式の読解を可能にすることを一応の目標にすべきであると言えるであろう。

7. 構造ストラテジー

日本人大学生の大半は、既に日本語の説明文を十分に読み理解する能力を身に付けていると言ってよいであろう。日本語の説明文においても、英文と同様に、テキストが構造を形成しており、そのようなテキストの読解能力があることは、そのグローバル・コヒアランスを読み取ることができることを意味する。日本語の説明文が英語の説明文と同じ5種類のタイプに分類されるのか、タイプ数が多いのか、少ないのか、或いは、特定のタイプに分類することが不可能なのか、今後の研究に待つ他ない。しかし、同等の重要性を持つ文のリストでない限り、テキスト構造を持っていることに変わりはなく、明示的なコヒージョンが与えられている時はそれからコヒアランスを組み立て、明示的なコヒージョンが与えられていない時はテキスト構造のタイプについての知識により、或いは、経験により得たテキスト構造に関する知識により、コヒアランスを組み立てる能力を持っていることを意味する⁹⁾。

説明文がユニバーサルなテキスト構造を持っているかどうかは、今後の研究の成果を待つのみであるが、テキストが構造を持っていることは、どの言語についても言えることであろう。従って、テキスト受容者は、テキスト読解のユニバーサルなストラテジーとして構造ストラテジーによりグローバル・コヒアランスを組み立てていると言えるのではないか。ここで言う「構造ストラテジー」は、先に述べた様な、特定のテキスト構造を同定する為のストラテジーではなく、テキストを構造を持つものとして捉え、そのコヒアランスを組み立てる方策を常に意識してテキストを読み進める、より広い意味での

「構造」を意味する。

この意味での「構造ストラテジー」を英文テキストの読解に際して意識的に持たせることは、学生に、英文読解が単なる文のリストの翻訳ではなく、日本語の説明文の読解と同様に、テキスト生産者が一体何を伝えようとしているのか、そのグローバル・コヒアランスは何かを、アクセス可能な情報全てを動員して探ることであることを理解させ、実践させるのに非常に有効な方法ではないであろうか。ストラテジーは、目的を達成するための方策であり、規則 (rule) とは異なり、適用すれば必ず成功するとは限らない。グローバル・コヒアランスであると思当を付けていたものが、ローカル・コヒアランスでしかなかったということも有りえるが、そのような場合に、又違ったコヒアランスを組み立てていくのが構造ストラテジーである¹⁰⁾。

8. おわりに

本論では、本来ならリーディングに含まれる、文字から文に致る迄の間のレベルにおける読解の過程には一切触れずに、文以上のレベルにおける読解の過程にだけ言及してきた。又、文以上のレベルにあっても、テキスト受容者がコヒアランスを組み立てていく上で必要とするであろうテキストが誰により、何時、何の為、どのような状況で書かれたのか等のプラグマティック (pragmatic) な情報についても言及しなかった。更に、コヒアランスの組み立てに関与してくる主題 (theme) や新・旧情報についても言及しなかった¹¹⁾。

又、本論は、テキストの理解にテキスト受容者の背景知識が大きな役割を果たしているとするスキーマ理論 (scheme theory) の枠組みに組み込まれる部分を多く持っていることも事実であろう。更に、テキスト構造・修辞構造に関する背景知識である形式スキーマ (formal scheme) のみに言及していたが、内容スキーマ (content scheme) と呼ばれるテキストの意味内容に関する背景知識や、フレーム (frame)・スクリプト (script) 等の知識もコヒアランスの組み立てに大きく関与していることも事実である。

逆に言えば、テキストの読解にはこれだけ様々

な要素が関与しているということであり、本論ではその中で、コヒアランスとコヒージョン、特に、グローバル・コヒアランスとグローバル・コヒージョンに焦点を当てた。テキストが文のリストではなく、意味的により重要な層と、それほど重要でない層からなる構造を形成していることを強調することにより、文文法に慣れ親しんできた学生に、読解の対象が文の境界を超えて存在することを理解させる為であり、構造ストラテジーという、日本語による読解との共通項を理解させる為である。

本論では、紙面の余裕がないこともあり触れることはできなかったが、今後は、具体的な英文テキストの分析を通してグローバル・コヒージョンとグローバル・コヒアランス、ローカル・コヒージョンとローカル・コヒアランスの区別の有効性を確認する必要がある。又、日本語の説明文において、上記の区分がどの程度有効であるのか、英語の説明文に見られるとされる特定のテキスト構造のタイプが日本語の説明文にも見られるのか等の確認の必要がある。

Notes

- 1) 国語学において、文の連鎖関係は文章構造の観点から見た文間関係という意味を持って使われているが(例えば、永野 賢(1986)文章論総論。初版、朝倉書店、東京、p103.)、本論では単に複数の文の連続の意である。
- 2) de Beaugrande R and Dressler W (1981) *Introduction to text linguistics*. Longman, London, p 4.
- 3) de Beaugrande and Dressler (1981) *Introduction*. pp 3 — 4. 尚、英語のコヒージョンについては、Halliday MKA & Hasan R (1976) *Cohesion in English*. Longman, London. に詳しいが、コヒージョンとコヒアランスとの区別は明確ではない。
- 4) グローバル・ローカルの区分は、van Dijk TA & Kintsch W 等の著作(例えば、(1983) *Strategies of discourse comprehension*. Academic Press, London.) にも見られるが、グローバルとは、テキスト全体のまとめ・要旨のレベルの意であり、ローカルとはテキストを構成する個々の命題 (proposition) のレベルの意であり、本論の区分とは異なる。
- 5) Meyer BJF, Brandt DM and Bluth GJ(1980) Use of top-level structure in text : key for reading comprehension of ninth-grade students. *Reading Research Quarterly*, 16, 72—103.
- 6) Gernsbacher MA(1990) *Language comprehension as structure building*. Lawrence Erlbaum, Hillsdale, N. J.
- 7) Meyer BJF and Freedle RO(1984) Effects of discourse type on recall. *American Educational Research Journal*, 21(1), 121—125.
- 8) Carrell PL(1988) Introduction : interactive approaches to second language reading. In Carrell PC, Devine J and Eskey DE, eds. *Interactive approaches to second language reading*. Cambridge Univ. Press, New York, pp 1 — 7.
- 9) 日本人大学生の、日本語の読解能力と外国語としての英語の読解能力との間に、ある程度の相関関係があるとの報告もある。(Nagasaka A(1992) Top-level structure in reading L1 and FL expository prose. *JALT Journal*, 14(2), 127—142.)
- 10) van Dijk TA and Kintsch W(1983) *Strategies of discourse comprehension*. Academic Press, London, pp64—68.